一億÷五千

（旭新聞　平成十八年十一月十五日　朝刊）

心臓移植へ募金呼びかけ　難病幼児の両親ら

『重い心臓病のため、米国での心臓移植を望む相模原市在住の田中智子ちゃん（6歳）の両親らが十四日、同市内で会見した。手術費用などに約一億円が必要となる見通しで――』

「子供一人くらい、死なせておけばいい」

薄暗い部屋で、陰気な男が独り呟く。

（旭新聞　平成十八年十二月二十日　夕刊）

心臓病女児に募金集まる

『――『智子ちゃんを救う会』は今日午前、募金総額が目標の一億円に到達したと発表した。智子ちゃんは来年一月に渡米し、心臓移植手術を――』

「お前らは偽善者だ」

薄暗い部屋に、新聞紙を握りつぶす乾いた音が響く。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

子供を想う親の願いを、見知らぬ隣人を助ける善き人々の心を、ひたすら冒涜する男。

しかし彼は医者だった。

そしてここはアフリカの貧困地域だった。

命は平等だ。そう信じる彼は五年前、世界一の長寿国から、その対極にあるこの国にやってきた。

彼は、一人でも多くの命を救いたかった……

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

薄暗い部屋のドアがノックされ、現地人の看護婦が入ってきた。

「先生、サミーが死にました」

短く告げたその声はどこまでも事務的だ。なんとなれば、この国では毎日千人単位で子供が死んでいる。いちいち嘆いていたら精神が保たない。

報告に対し「そうか」とだけ返した男も看護婦と同様、この十年で悲しみを感じられなくなった。

さらに十年もすれば、この無力感にも慣れてしまうのだろうか。

医者に『飢餓』は治せない。必要なのは、金だ。

ほんの五千円、それだけあれば子供が一人死なずに済むのに。

（……命は平等じゃない。そういうことなんだな？）

僅かな援助物資と一緒に祖国から送られてきた新聞を、男は暖炉に放り込んだ。

炎がぱっと燃え上がり、薄暗い部屋に黒い煙が漂う。

生と死の狭間で

人は時に自分が生と死の狭間に
立たされたことを知覚できるときがある。
あの日、私は生と死の狭間をふらふらと歩いていた。

7月29日、私は財布を落としたショックに打ちひしがれていた。
21:00から始まった「hunter × hunter」の二話連続放送を見るも、視覚神経が伝える信号を脳が拒否していた。
CMに入ると同時にふと時間が気になって携帯を見てみた。そこに表示されていたのは「7/29(木)9:52pm」という文字列だった。
その瞬間、私の頭に3日前の約束がフラッシュバックした。「29日までに高校生クイズの申し込み用紙を出しといてね。よ・ろ・し・く☆」という約束だ。身体から魂が抜けかけた。
「締切今日じゃん!」
私はまるで修羅場モード直前の漫画家のような叫びを漏らした。私は絶望に眩暈がした。何せ、私はクイズ研究会の会長だ。もしも、エースチームが高校生活最大の大会『高校生クイズ』に出ないとなれば、まさに研究会のアイデンティティに関わる。部活内部の社会的な「死」も確定する。
私は生と死の狭間に立たされた。
私は家主である母に意見を求めた。母は私を郵便局の本局まで送り届けてくれることを了承してくれた。私はその言葉に素直に従った。
車に飛び乗った私は本局を目指した。夜の暗闇の中に浮かび上がった郵便局は無情にも暖かな光をたたえてはいなかった。私はめげずに別の本局へ向かった。徐々に私の顔は青さを増し、明らかに制限速度を超えた母の車よりも消印の心配だけが私の心を苛んでいた。
しかし、別の本局もまた、自動ドアの『いらっしゃいませ』という声とキャッシュディスペンサーの機械音だけが満ちた無機質な空間と化していた。
次の瞬間、母が新宿の本局という新たな選択肢を提示してくれた。それを聞くやいなや、Suicaと封筒を掴んだ私はハヤテのごとく走り出した。自分が犯した愚かなミスに気づかずに。
電車に疎い私はとりあえず赤羽に出ようと思い、京浜東北線ホームへ走り、10:20発に飛び乗った。赤羽までの15分間は我が子の誕生を待つ父になったかのように長かった。
赤羽に着き、どの路線が新宿に行くのかという疑問にぶち当たった。
そこで、私は携帯で友達に尋ねようと、左ポケットに手を入れた…手に携帯の冷たい感触が無い。やっと自分の犯した愚かなミスに気づいた。
「携帯、家においてきたぁぁぁ!」
私はこの状況を打破すべく理論をこね始めた。そして、次の結論を導いた。埼京線は最強だ、間違いない、と。長考は時間の無駄なので埼京線ホームまで行き、停車駅を確認し、しばし安堵しつつ電車を待った。私は電車を待つ十分が1時間にも2時間にも感じられた。結局、電車に乗り込んだのは10:50だった。
このとき、私の頭の中では社会的な死を覚悟すると共に、消印受領と私の本物の命を同じ天秤の上に乗せていた。そして、そうこうしている間に電車は止まった。未踏の地・新宿へ第一歩を踏み出した。
私はとにかく走った。途中で会った駅員に道を聞いても曖昧な回答しか返ってこなかった。西口にある、というのはわかったから、そちらに向かった。私の前に三つの道が拓けた。安田口・南口・小田急線モノレール入り口。安田口は一方通行なので不適、南口は駅員が西口、と言ったので不適。私に残された道は小田急線モノレール入り口しかなかった。確かに3択クイズだったら正解だ。私は信じる方向へ走り出した。
走り始めてすぐに外に行く階段と案内板(まやかし)があった。私はそんな案内板に目もくれずに走り出した。まるで、盲信した新興宗教の信者の如く。それが、郵便局と反対方向であることは言うまでもない。
どれくらい走っただろうか、私はようやく自らの過ちに気づいた。やはり何事も盲信してはまずかったようだ。OL風の女性に道を聞くが、曖昧な回答しか得られないし汗だくの姿を笑われるし散々だ。
その時、私の頭の中でメロスが囁いた。ただ「走れ」と一言だけ。
私は澱んだ空気を切って走った。
そこは繁華街にぽつんとある郵便局だった。
私がすがる思いで中に入ると、局内はだいぶ混んでいた。
間に合うだろうか。列に並びながら、不安は最高潮まで高まった。
しかし、それは全くの杞憂に終わった。局員のお兄さんに聞くと優しく、「大丈夫ですよ。」と言って軽く処理してくれた。私は消印(ケシヲシ)をどうにか助け出すことが出来た…私の戦いは終わった。
生の喜びが私の体を駆け巡り、漆黒の空に溶けていく。
新宿をサンダルでぺたぺた歩く。世界がとても綺麗に見えた。

「はい、大丈夫です。友達と一緒ですから」
今日もこうして無為な嘘をつく。とっくにばれているのは知っている。でも、建前として。
『そうなの、でも』
「分かってます。ちゃんと夕食までには帰りますから」
『そ、そう……。ねえ、休日なんだし、たまには家で』
「あ、ごめんなさい。友達が呼んでますので」
わざとらしくその言葉を遮る。電話の向こうからは、気まずそうな義母の無言と、ほっときなって、という冷淡な義姉の声が聞こえてきた。罪悪感は、ない。
「じゃあ切りますね」
返事も待たずに僕は電話を切った。これが、僕と、今の家族との、距離。

Homeless

木に寄りかかりながら、僕は携帯をポケットにしまった。家から歩いて二十分くらいの小さな公園。友達の都合が付かない休日は、いつもここで何をするともなく時間をつぶす。しかしさすがにこの季節は寒い。近いうちに別の避難先を探すことにしよう。
そんなことを考えていると、パチパチという跳ねるような音が聞こえてきた。見ると、六十歳くらいのおじいさんが集めた落ち葉でたき火をしていた。そのせいで、空虚な頭にいつもの記憶が戻ってくる。

不審火で家が全焼。子供一人を残して両親はそろって焼死。そんな、せいぜい三面記事にしかならないような、なんてことのないありふれた事件。だが、当事者にとってはそんな簡単に流すことができるはずがない。
残された子供は、当たり前のように路頭に迷った。もともと両親の親戚付き合いが希薄だったことも手伝い、大人たちはその子を互いに押し付け合った。その末で、子供は父方の叔母の家で一応の居住権を得られることになった。

あれからもう半年。僕はいまだにあの新しい家に馴染めない。家の人は良くしてくれるし、両親を思ってなくこともない。たらい回しにされたことが脳裏に残っているのか、あそこは自分の居場所ではないんじゃないかという気持ちが押さえきれない。新しい家族とはどこか距離を置いてしまう。義姉に煙たがられるのも当然だろう。そのせいで、休日はいつもこうしてあの家から逃げ出してきている。
よく、人間には衣食住が必要だと言われている。なら、今の住の形が歪な自分は果たして生きていると言えるんだろうか。そんな屁理屈じみた哲学が、頭の中で不快に踊った。

気がつくと、そろそろ夕食の時間だ。世話になっている手前、迷惑をかけるわけにはいかない。急いで帰ろう。そう思っていると、視界に茶色い小さな物が入ってきた。見ると、小さな蓑虫だった。ゴツゴツとした衣に身を包んだそれを、何とはなしに突っつく。すると蓑虫にしては不自然な、カラカラと言う朽ちた鈴のような音がした。しばし考え、どこかの本で読んだ知識を思い出した。

蓑虫にはある天敵がいる。それはある小蜘蛛だ。その侵略者は、頑強な蓑虫の外皮に小さな穴をあけるとそこからまんまと侵入してみせる。安寧の城たる防護壁の中にいる蓑虫にはまさに寝耳に水だろう。そして、小蜘蛛は自らの身体の何倍もある獲物からいっさいの汁気を奪い取る。本来のその家の主である蓑虫を灰殻のような姿にすることで。
こうして、小蜘蛛は蓑虫の命を蹂躙し、自らの衣食住を満たすのだ。

そんなあやふやな知識を思い出すと、僕は歪んだ感情を抱いていた。この蓑の中にいるであろう小蜘蛛に、嫉妬のような同族嫌悪のような、そんな卑屈な感情がふつふつと湧いてくる。衝動的に、僕はその蓑の糸を枝から引きちぎっていた。手のひらの上のそれを見て、黒い考えが頭を焦がす。どうしてやろうかとあたりを見渡すと、さっきのたき火が見えた。その瞬間、何故か冷水を浴びせられたように僕の感情は一気にさめた。もう一度その蓑を見ると、近くの草むらに投げ捨て、僕は急いで家へと向かった。
とてもじゃないが、たき火に投げ込むことなんてできなかった。

「君とは　一緒にいられない」
彼の言葉を何度リフレインしたかわからない。私は生まれて初めての告白の後、絶え間なく襲ってくる疲労感に身を任せて、ただ椅子の上に座っていた。彼は私を嫌いじゃないと言ってくれたけれど、彼の気持ちを動かすほどの魅力が私には、どうやら、ないらしい。
涙はこれでもかというほど、流した。だけど、いつもの「元気で明るい」私には復活できない。彼の一挙一動がどれだけ私の生きるためのエネルギーだったかを、本当に、痛いほど、思い知らされていた。

Energy to LIVE, Energy of LIVE

そんなときだった。
「でかけて　みない？」
親友が笑顔で話しかけてきた。今思えば、彼女は私のことを心から気遣ってくれていたのだろう。そのときは私は、ただ「そうだね」と呟いただけだった。彼にふられて、何に対しても無気力になってしまった私を見ている彼女の気持ちにまで気が回る余裕がなかった。

でも。

電車の中の人たちは、いつもなら私たちにしかわからない会話を、同じようにしていた。その時点から妙な一体感が生まれてくる。その場所へと近づけば近づくほど、緊張も高まってきた。
そして暗い闇に放り込まれた。そこはとても大きな空間だったけれど、それ相応の人がいた。人々の熱気で、それでなくても暑いのに、さらにさらに、熱くなる。

突然流れるギター音。
同時に、ステージに、照明があたる。
人々の悲鳴にも似た歓声。

私はその渦に揉まれていく。

そして、そこには、いつも遠く遠く遠かった人たちが、息をしていた。

「・・・の、LIVE-GYM へようこそーー」

ライブ。
ああ、どうして、それがそう呼ばれるかがわかった。なんてそれは生に満ちあふれているのだろう。あまりにもの熱気、ぶつかり合う体。
私は、あの空間にいるとき、彼のことを忘れていた。ただただ音楽に任せて踊り狂う。自分で気づいていないほどのスピードで、心の痛みがどんどん吐き出され、その代わりにエネルギーが積み重ねられていく。私の体にはもう入りきらない。　そして私は思わず叫んだ。周りも同じように叫んでいる。
ああ、なんて、なんて、　！　！　！

たった2時間のそれが終わった後、私の中にはあのときのような「もう何もしたくない」ではなく、「明日からまたがんばろう」という疲労感が湧いていた。
「最高だったね」
私が笑顔で言うと隣で親友が笑っていた。
「久しぶりに　笑顔見た」

悟しい！

Live　生きる

自分は生きている価値があるのだろうか？最近のことでいうと、バイトで店長に嫌われ、常にいじめられていたことで、一ヶ月少しでバイトをやめてしまった。好きだった人には、いつの間にか知らないうちに彼氏が出来て、訳も分からないまま振られてしまった。このようなことで悩んでいるうちにも、一年のうちで一番大事な期末が迫っている。

あー全部面倒くさい。そしてくだらない。こんな腐った世界とはお別れして、もっと高潔な精神世界に旅立ちたい。死のう。死んだら、今より少しは変われるはずだ。

死ぬ方法を考えてみた。飛び降り、首つり、どれも平凡でダサイな。いろいろ考えてみて、すばらしい死に方を思いついた。自分の口で息を止め、そのまま、窒息死をしよう。自殺をする人はみんな、刃物やロープ、重力などの道具を使うけれど、それは格好悪いと思う。どうせ死ぬのなら、自分の体を用いて、そして自分の意志のみで、自分の一生を終わらせるべきだ。そのほうがカッコいいし、わかりやすい。

息を吐き出し、口を閉じた。鼻はいつも詰まっているから塞ぐ必要がない。唇が乾燥して荒れていて、上唇と下唇がへばりつき、口を少し開けようとしても唇はへばりついたままだ。

三十秒　早く死にたいな。

六十秒　あと二倍くらいで死ねるかな。

八十秒　きつい。でもここで逃げたら一生逃げっぱなしだぞ！

八十八秒　やっぱ逃げよ。

プッハー、生きてる！俺は生きてる！春休みは暇だから、海外にでも一人で行ってみようかな。

惜しい2

キラメキ戦士スター―☆マン

久しぶりの第二話

やあ皆！元気にしてたかな？
前回（第一話を見てくれ）現行犯逮捕された俺は組織のボスに来て貰い、あの冷たく暗い取調室から出る事が出来た。どうやったら一般人に対する暴行を正当化出来るのか知らないが、うちの組織はなかなか凄いらしい。
ちなみに、かつ丼が出なくてがっくりだ。

何でも今回は世間一般に対する我々の認知度を高めるため（変身ヒーローとその組織が有名でいいのだろうか）ライブイベントを行うらしい。具体的に言うと悪の怪人を呼びつけて叩きのめす。どう見てもいじめです。本当に有難う御座いました。
こんな作戦に引っかかるのかと思いつつ葉書を投函した俺だったが向こうはあっさり承諾した。封筒には速達に配達記録まで付いていた。そこまでリベンジしたかったのか。

約束の日、日曜日の遊園地のステージ。俺は怪人を待っている間、集まってきた子供達の相手をしていた。
「わー！かっこいー！おにーさんなんて名前ー？」
「わははー、かっこいいか！おにーさんはスターマンって言うんだ！」
「だっさ、ネーミングセンス最悪」
最近の子供は容赦がない。こんなんで俺の評判は上がるのだろうか。

約束の5分前に怪人は来た。「待った？」「今来た所さ」台詞だけ聞くと別の状況にしか思えない挨拶をした後、ライブと言う名の戦いが始まった。
「ハアアッ！」「フンッ！」「これでも喰らえっ！」「そんな攻撃が俺に通じると思うのか！」「やれー！そこだ怪人！やっつけろー！」
子供達も大盛り上がりである。怪人の応援しか聞こえない気がするがきっと気のせいだ。もう十分だろう。そろそろトドメを刺さねばなるまい。
「必殺！スター☆マンビーム！」
ズドゴオオオオ。跡形も無く消えた怪人。と半壊したステージ。今日は技の切れも抜群だ。一人悦に浸って居るとどこからか見覚えの有る顔の警察がやってきた。
「なんだ、この大惨事は!?またお前か？ちょっと付いて来い！」
「ええっ、また!?なんで話通ってないの!?ここうちの遊園地だよね!?」
引きずられて行く俺。懐かしいこの感触。

そして、俺はまた塀の中にいる。ああ、人生ってなんなんだろう。

1　マイ・ライブ　10位　0口

　さあ、人生の幕が開く。
　そんな始まり気分に満ちた高揚感が伝わってきて本番前の緊張を共有できます。
　現実におしつぶされてゆく夢を、またどんどんと押し返していって――レイアウトにこめられた意味を作者さんからうかがって、より味わいが深まりました。
　ラストも気持ちよくはじけてGOOD。
イチオシフレーズ：「いくぜっ！」

2　Question which has no correct answer　8位　1日

　英語であることの意味。これが日本語だったらダサくなってしまいそうなところを、きれいなリフレインで波のような響かせたところかな、と読みました。
　敢闘賞！　おつかれ。

3　空を飛ぶ夢　6位　4由

　浮遊感とともに届けられる臨死体験。アイディアは珍しくないけれど、ていねいに作ってあって好印象です。
　親＝両親でしょうか、それとも「手が痛い」から父親？　そのあたりもきっちり詰めて見せかった。

4　Dream and live　10位　0口

　数値をもとに理想論としてかっちり格調高くまとめられているのですが、ではどうやってその理想を実現してゆくのか、という提案までは行きたかったところ。でないと読者への説得力が、いまいち備わらないと思います。
イチオシフレーズ：「Dream as if――」

5　My Life　8位　1日

　いろいろ笑かそうとジャブを繰り出して楽しいのですが、デフォ、のようなノリ口調が、ちょっと上滑りしてませんか。作者さんだけハイテンションで、読者さんが付いていけるか心配。むしろ、たんたんと語って、クスッと笑ってもらう路線が似合いそうな話題です。
　でも綾田賞ゲットですね。おめでとう。

イチオシフレーズ：「みょんみょん」×２

６　「生きてる理由なんてないだけど死にたくもない」　7位　3田

つぶやきのような。
「死語」からスタートして「人」に停車。もう一展開あると良かったか。起・承・転で終わったような印象です。

７　無題（アイツ）　4位　5曲

小さな村のパブかな、と読んでいったのですが、薬草？　ゲーム？？　ドラクエ？？？
そこは気にしないで……らしいです。

８　生の実感　10位　0口

じんと来るあたたかさ。ハデなシーンがないおかげで、そぼく気分で浸れます。
いい話は飽きた、なんてこと、ないと思いますよ。

９　一億÷五千　1位　22億人動員

いのちのねだん。重い問いかけをドラマ仕立てで具体的に見せたところが、しっかり受けとめられての驚異の22億人動員、あざやかでした。おめでとう!!!
そんな彼は生命理工学部。これから進む道のなかで、この割り算の意味が脳裏をよぎる場面もありそうです。
イチオシフレーズ：「お前らは偽善者だ」×２

１０　生と死の狭間で　3位　6千人動員

出ましたクイズ研究会。ハッピーエンドでほっとしたけれど、前半引っ張りすぎて、かんじんの新宿の夜バトルが薄くなってしまったのが残念。
大会の結果がどうなったかも知りたいところ。

１１　Homeless　2位　13万人動員

カラカラと小蜘蛛に重ねた自らの不安。寒さの感覚とともにリアルに伝わってきます。
師匠は、周りの光景を自分の胸中とシンクロさせつつ、ひとり悶々、というシーンがお好きなようで。
ひさびさの上位、ということになるでしょうか。おめでとう。
イチオシフレーズ：「たき火になげこみ」

１２　Energy to LIVE, Energy of LIVE　4位　5曲

　ラストは明るく。
　ライブの熱狂と生きる意味。お題にきっちりフォーカスして、しあわせな読後感へ。安定した歌唱力できっちりトリをつとめていただきました。
イチオシフレーズ：「ああ、なんて、なんて、　！！！」「！！！」

惜しい１　Live　生きる

　カウントアップで見せたプロセスが、とても真実味があって、実験したかな？　と思える親しみやすさでした。

惜しい２　キラメキ戦士スター☆マン

　容赦ないガキどもにもっとグサグサつっこんでもらって、ポリスマンの力を借りずともノックアウト、という展開だったら、もっと笑えたのでは？？

☆祝　今週の受賞作品☆

班名	賞タイトル	作品番号
Ｄ・Ｑ	文学賞	１１
RIVE	実は自分だけが大好きで賞	1
佐渡	ライブが遅いで賞	1
智子ちゃん	文の長さが絶妙で賞	1
U	U賞`	8
VVVF	第５回小学生賞	4
World Tour	英語の文賞	2
X-MEN	がんばりま賞	5
\5000	センセー賞ナル	9
ゼータ関数	綾田鉄道999賞	5